令和7年度(2025年度) 学校評価総括表　【伊丹市立緑丘小学校】

教育目標	人間性豊かな、たくましく生きるみどりの子の育成
重点目標	①「確かな学力」を育むために　②「豊かな心」を育むために　③「健やかな体」を育むために　④安全で安心な学校づくり、環境整備　⑤開かれた学校づくり ⑥教職員の働き方改革について　⑦「生徒指導体制」づくりのために

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携 ④情報活用能力の育成 ⑤英語教育の充実 ⑥デジタル化の促進	① ・思考力・判断力・表現力の育成を図り達成感を味わい粘り強く学習できる力の育成 ・共に学び合う楽しさを感じさせる授業による学習意欲の向上 ・読書活動の充実 ② ・基礎・基本の確実な定着により自ら学ぶ意欲の向上 ・どの児童もわかる授業の創造 ③家庭学習の充実 ④ 情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成 ⑤ 英語学習に対する興味関心や意欲の向上 ⑥ 授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進	① ・学年に応じた思考の方法を示す。話し合う目的や視点を明確にする。 ・課題解決のために、対話の中で思考方法や表現方法を意識させる。 ・指導案に、思考方法や考えの形成の手立てを明記し、意識化を図り、校内研究授業実施後に、それらについて中心に議論していく。 ・朝読書と図書の時間を週1回設け、読んだ本は読書記録カードに記録する。 ・読書数に応じて、読書の木への掲示・読書カードへのシール貼り・もう一冊貸出券の配布を行う。 ・図書委員による読書の啓発をポスターや読み聞かせ、イベントなどを通して行う。 ② ・ミニプリントやデジタルドリル等の活用・少人数授業を実施し、基礎・基本の定着、学力の向上を図る。 ・モジュール学習で、週1回、国語の書く活動を取り入れる。 ・課題を工夫したり、具体物を操作したり表現方法を工夫したりする活動を取り入れる。 ③ 1・2年生は30分、3・4年生は60分、5・6年生は60分＋αを目標として家庭学習に取り組む。(学習塾や家庭教師なども含む) ④ スクールタクトやミライシードなどの学習支援アプリやプログラミング教育、モラル教育を行う。 ⑤ 専科教員・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容などを積極的に行う。また、書く内容も取り入れ英語力の向上を図る。 ⑥ ICT支援員と連携し、困ったことを聞きやすい環境をつくる。 ・ICT機器を整理し、使いやすい環境をつくる。	① ・内容と思考方法の組み合わせや、考えの形成の手立ての蓄積 ・児童が自分の考えをもって、対話に向かっていくことができる。 ・理由・根拠を明確にして、自分の考えを相手に伝えようとする。 ・他者との対話を通して、得られた考えをもとに、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。 ・読書活動を充実させ、学校図書館開館期間中一人あたりの月平均貸出冊数が7冊を超えることを目指す。 ② ・教職員アンケートにおいて、「基礎基本の定着・学力の向上を図っていますか」の項目に対して、肯定的な回答が90%を超える。 ・児童アンケートにおいて、「授業は分かりやすく、楽しいですか」の項目に対して、肯定的な回答が90%を超える。 ③ 児童アンケートにおいて、学年目標を達成した児童が80%以上になる。 ④ プログラミング教育を各学年で実施する。 「学校やお家で、タブレットのルールを守って使っていますか。」で、肯定的な回答した割合が、85%を超える。 ⑤ 会話を取り入れた活動や、デジタル教材・ICTを活用することで、楽しんで意欲的に取り組むことができるようになる。 ⑥ ICTを活用した業務の効率化や授業の効果的な活用が進む。	B	① ・校内研究を中心に、考えの形成について議論を行い、手立てを蓄積することができた。 ・児童アンケートにおいて「自分の思いや考えをノートに書くことができる」で肯定的な回答をした児童が85%を超えた。 ・中・高学年の児童アンケートにおいて、「理由をはっきりさせて、自分の考えを伝えることができる。」と「目的に応じて、ペアやグループで話し合いをすることができる」で肯定的な回答をした児童の割合が、昨年度を下回った。 ・朝読書や図書の時間、業間休みを活用することによって、目標としていた、月平均貸出冊数7冊を達成することができた。定期的に新しい本を購入していただいたことでも読書に対する意欲がわいている様子だった。 ・読書数に応じてのもう一冊貸出券や表彰も効果的であった。 ・図書委員による読書の啓発イベントを行ったが、行事の都合で3学期になってしまった。計画的に企画をすすめて行事が重なっても2学期にできると良い。 ② ・週に1回、モジュール学習で国語の書く活動を取り入れることができた。 ・教職員アンケートにおいて、「基礎・基本の定着・学力の向上を図っていますか」の項目において、肯定的な回答が95%を超えた。 ・児童アンケートにおいて、「授業は分かりやすく、楽しいですか」の項目において、肯定的な回答が85.4%（1～3年90.4%、4～6年80.6%）だった。 ③ 「家に帰ってから学習をしていますか」の項目で1～3年は肯定的意見が82．7%、4～6年は75%で、全体としては73．9%と昨年より微増した。 ④ ・スクールタクトの活用方法についての研修を行った。 ・児童アンケート「学校やお家で、タブレットのルールを守っていますか」で、児童が肯定的に回答した割合が、92%となっており、目標の85%を達成した。しかし、保護者アンケートでは、昨年度77.1%の対し今年度は75.4%と肯定的な割合が下がっている。両者の肯定的な割合には差があるため、家庭での活用方法に課題があるといえる。 ⑤ 会話を取り入れた活動では楽しそうに学習する姿勢が見られた。デジタル教材やICTを活用することにより児童は意欲的な発語活動が増えてる。書く活動は取り入れたがまだまだ苦手な児童が多い。 ⑥ まなびポケットのチャンネル機能や連絡帳を有効に使うことができた。しかし、主に、チャンネル機能や出席連絡の使用だけにとどまったので、他にも可能性を模索する必要がある。	① ・校内研究の数を増やし、「考えの形成」を促す手立てについて議論できる機会を増やす。 ・今年度の児童アンケートの結果を共有し、「考えの形成」と「対話」を中心に議論を行なっていく。 ・朝読書の継続をするとともに、さらに読書活動が充実するように、図書委員会の児童を中心とする活動を充実させていく。 ・新刊や、幅広い種類の本の充実を図り、読書に対する意欲を高める。 ② ・モジュール学習において、「読書」と「書く活動」をどの曜日に行うかを時間割表に明記し、意識化を図る。 ・今年度の「書く活動」の集約を行い、来年度への引き継ぎを行う。 ・コンサルティング授業など授業を見合う機会を増やし、授業づくりの工夫を研究していく。 ③ 保護者アンケート「お子さんは家庭学習の習慣が身についていますか」で肯定的意見が昨年度より上昇した。児童アンケート1～3年生は肯定的意見が80%を超えている。今後もある程度学年で家庭学習内容を合わせつつ、各クラスのオリジナル宿題も大切に、学ぶ意欲につなげていきたい。 ④ 家庭でのタブレット活用も視野に入れ、正しくタブレットを使用できるよう情報活用能力育成の具体例を提案する。 ⑤ 発語活動でけだな書く活動でもデジタル教材やICTを活用し、英語力の向上に生かしていきたい。 ⑥ まなびポケットに他にも機能があるので、適宜、授業や学校運営に導入していく。またそれを周知し、円滑に活用していく。	・大人になってわかるが、読書によって身につく事柄や、感情は計り知れない。月平均貸出目標の7冊をクリアしたことは評価できる。 ・教職員アンケートで「基本的・基礎的学力向上」について肯定的意見が90%を超える回答、及び、児童アンケートにおいても児童アンケートにおいても1～3年は肯定的意見が90%以上と素晴らしいが、目標はあくまで誰1人取り残さない取り組みなので、、100%目指してより努力してほしい ・家庭でのタブレット使用は賛成だが、ルールをきちんと守って、使用させることが重要だと考えます。

学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	① ・命を大切にし、思いやりに満ちた子の育成 ・基本的生活習慣の定着（生活指導の充実） ② ・いじめへの対応 ・児童の問題行動への対応 ③ 不登校児童への支援体制の確立 ④ 校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動などの実施	① ・道徳や人権の授業等を通じて、命やお互いを大切にし相手を思いやることのできる子どもの育成を行う。 ・みどりっ子のきまりや月別生活目標、緑小しぐさ「あろは」の推進を図るために、2．3学期始めに生活習慣の振り返りを行う。 ② ・年3回、アンケート調査を実施し、教育相談を行う期間を設け、実態調査を行う。 ・事例に応じ、職員全体で共通理解し、対応する。 ③ 別室と不登校支援員を配置し、不登校児童に対応できるようにする。また、不登校児童への対応を職員全体で共通理解し、担任だけでなく組織的に取り組む。 ④ 教育課程に基づいた、遠足・社会見学等を計画し、子どもたちがさまざまな経験や集団活動ができる学習の場を設ける。	① ・道徳、人権の授業後の感想で、自分を大切にしたり、相手の心情を考えたりする気持ちの深まりが見られる。 ・きまりを守り、児童アンケートにおいて、「月別生活を目標を守って生活できている。」と回答した割合が80%以上になる。 ・緑小しぐさ「あろは」を意識して行動し、安全に生活できるようになる。 ② ・学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を大切にする。 ・児童の実態を話し合う場を月１回以上設定する。 ③ 不登校支援員の活用の幅を広げていく。 ・別室の実態を全職員に周知し、より活用できるように、環境整備に取り組んでいく。 ④ 現地で学ぶ校外学習や、外部の専門性の高い人材から学ぶ出前講座を計画し、実施する。	B	① ・児童アンケートの「自分を大切にしたり相手の気持ちを考えて行動していますか。」については、90.2%と高い結果になっている。しかし、「自分には良いところがあると思いますか。」の結果は、80．9%とほかに比べても低い結果となっている。そのため、自尊感情を高める教育活動の推進を今後も行う必要がある。 ・児童アンケートの結果は、84%で当初の達成目標はクリアし、昨年度同様の結果が得られた。職員への周知も徹底することで意識して取り組む児童が多く見られた。一方、「あろは」を月別目標に組み入れたが、廊下を走る児童がいるなど改善必要がある場面が見られた。 ② 昨年度に引き続き、「初期対応　その日のうちに　報・連・相」の合い言葉をもとに対応することができた。だんだんと定着しており、早め早めの対応ができるようになり、場合によって、ミニケース会議を実施することでより組織的に対応することができた。 ③ 昨年度に引き続き、別室を活用して、不登校支援にあたった。別室を活用することで、教室以外に登校する場所、またはリラックスできる場所が確保され、登校する日が増えた児童も見られた。 ④ 校外学習は、計画通り実施できた。本年度は、阪神淡路大震災30年の年なので、行き先を「人と防災未来センター」に変更するなど、その年に合わせて行き先を検討していった。また出前授業を活用し、専門的な知識を学び、自分事として活動することができた。それぞれの活動の中で、集団行動や季節の体験をすることもできた。	① ・自己肯定感、自己有用感を高める教育活動の推進を引き続き行っていく。 ・どうとくノート等を活用し、道徳教育の必要性を保護者に啓発するとともに、学校と家庭の協力体制を進めていく。 ・教師自身も、リフレーミング練習（肯定的な言葉かけ）をしていき、児童の見本となるように心がける。 ・昨年度の反省から月別目標に「あろは」を多く組み入れ、さらに職員が意識できるように働きかけることが必要である。 ② 毎月行っている相談部の定例会での児童の様子の情報交換を今後も継続していく。また、必要に応じて、ミニケース会議を開き子どもへの関わり、事案への対応を検討していく。 ③ 別室の実態を全職員に周知していくとともに、児童や保護者への周知を進めていく。 ④ 予算面での影響を考え、各学年で実施場所や 実施内容などを、計画段階で再確認する。	・自己肯定研、自己有用感を高めることはとても重要なことだと感じる。「自分には良いところがあると思いますか」の肯定的意見が増えたことは喜ばしい。今後も、引き続き、自己肯定感・自己有用感を高める声かけや、取り組みをお願いしたい。 ・保護者アンケート「緑小しぐさ「あろは」」について知っていますか」の肯定的意見が94．8%であり、すごいことがと思う。今後は、「あろは」が実際に守られていくことに力をいれてほしい。 ・・不登校児童への組織的な支援体制が機能しており、別室対応や支援員との連携が成果につながっている。引き続き、自己肯定感を育む教育活動の推進を期待したい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力あるクラブ活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	① 健康な体づくり・体力向上 ② 同好の友だちとの自発的な活動を通した、自分の趣味や特技のスキル向上 ③ 望ましい食習慣の推進	① 健康な状態で活動できるように、健康観察を行うとともに、健康を意識して生活できるように「ほけんだより」を用いた保健指導や、児童保健委員会による、保健広報活動を行う。 ・業間休みに多くの児童が外に出られるように、体育委員会を通じて、遊びの企画を行う。 ② 年5回、5、6年生を対象に行う。 ・自ら目標や内容を決める。 ③ 栄養教諭による「食の指導」を実施する。さらに、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。 ・食育だより（一言コメント）を掲示するなどして、活用する。 ・給食委員会による全校児童への広報活動を行う。	① 健康観察を毎日1回行う。　・「ほけんだより」を用いて、保健指導を月1回実施する。 ・児童保健委員会で年に2回以上、健康な生活についての広報活動をする。 ・「休み時間、外で遊ぶ」とアンケートに答える児童が80%になる。 ② 目標に向け、活動を積極的に行う。 ③ 季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする。	B	① 職員の学校評価で9割の教師が「保健だよりを用いて保健指導を行っている」「毎日の健康観察を行っている」と回答している。また、児童保健委員会では熱中症予防や冬雄感染症世予防のポスターを作成し校内に掲示した。 ・「休み時間、外で遊ぶ」とアンケートに答えた児童は66．6%であった。結果としては80%には達していないが、クラスのみんな遊びや体育委員会などの遊びの企画を通して、外で遊ぶ啓発を行うことができた。 ② それぞれのクラブで目標に向けて、積極的に活動に取り組むことができた。 ③ ・栄養教諭による「食の指導」を実施した。 委員会の活動では、みんなに気を付けてほしいことをポスターにした。各フロアの掲示板に掲示し、啓発した。また、食器の返し方や運び方を呼びかけるために立ち当番を行った。	① 引き続き。保健だより配布時に各クラスで保健指導をして児童の健康意識を高めていく。 ・今後もクラス活動や委員会活動を通じて外で体を動かす機会を多く持てるように啓発していく。また、クラスに配布しているボールの種類や、業間休みに貸し出している竹馬、一輪車などを充実させていく。 ② 引き続き、子どもたちから行いたいクラブ活動のアンケートをとり、自発的に活動できるクラブ活動の実施を行う。 ③ 季節の食材や栄養、給食に興味をもってもらえるように、給食委員会を中心に全校生に引き続き伝えていきたい。	・休み時間に外で遊ぶ児童をもう少し増えるようになれば嬉しい。 ・・食育に関する取組が充実しており、栄養教諭や給食委員会と連携した学びがしっかりと行われている。

学校教育	<u>教育相談・支援体制の充実</u> ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	① 自分らしさを発揮し、自ら学び、考え、行動できる児童の育成 ② 児童・保護者の困り感に早期に寄り添うことのできるSC・SSW ③ 支援の必要な児童のニーズの把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供	① ・キャリア教育で目指す4つの資質能力についての系統性を明確にする。 ・各学年の教科などの年間計画に4つの資質能力について書き入れ、どの単元でどの能力の育成を目指すかを明確にする。 ・キャリアパスポートを活用し、振り返り、自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・キャリア教育が目指す4つの観点について児童自身の振り返りの場として、アンケートを行う。 ・昨年度のアンケート結果をもとに、評価の低かった「自己理解・自己管理能力」の学習を意識的に取り組む。 ② 担任と保護者の面談等で、保護者のニーズを把握し、SC・SSWへの相談を提案する。 ③ ・職員に相談機関を周知する。 ・保護者との連携を大切にして、必要に応じて面談を積極的に行う。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・特別支援教育支援員を配置し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・小中連携を行い、就学相談を行う。 ・必要に応じて、個別指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。	① 人間関係形成、社会形成能力・自己理解、自己管理能力・課題対応能力、キャリアプランニング能力の4つの重点的な資質能力について、各学年に応じた姿が見られる。（例） ・他者との関わりや自己理解について、教科や行事を通して学び、他者と協力して何かを行ったり、自分の良さについて知ったりすることができる。 ・自分の仕事に責任を持ちやり遂げようとする姿勢や課題を自分の力で解決しようとする姿勢を身につけたり、働くことの意味について考えたりすることができる。 ② 連携が必要な児童・家庭が確実に関係機関とつながることができる。 ③ 支援が必要な児童の実態の情報を校内で共有し、支援体制を整え、引き継ぐことで、児童の支援を充実させる。	B	① 「友だちと協力しあって活動することができていますか」等、人間関係形成・社会形成能力に関しては、各学年とも自己評価が高い傾向にあり、「将来に夢や希望を持っていますか。」、「お手伝いや係、当番などの仕事を頑張ることができていますか。」等のキャリアプランニング能力の自己評価においても高い傾向にあった。「自分のいいところを見つけることができていますか」「やったらいけないことは、自分でストップをかけることができてますか」といった自己理解、自己管理能力に関しては、昨年度と同様に中学年、高学年ともに低い傾向にあった。そのため、自己肯定感を高め、自己理解、自己管理能力を伸ばしていくことが近々の課題である。 ②③ 保護者からの求めに応じて、市内各関係機関と積極的に連携したことにより、児童・保護者を適切な支援へつなぎ、且つ、関係機関からの助言を校内での支援に活かすこともできた。	① 学級活動や道徳などの教材や活動を見直し、自己理解、自己管理能力を伸ばす学習を取り入れていく。人間関係形成・社会形成能力は自己評価が高いので、他者の良いところ見つけなどを取り入れ、他者から自分の良いところを教えてもらうなどの活動を通して、自分の良さに目を向けさせる。また、教師も、児童一人ひとりの良さを見つけ、伝えていくことで自己理解を深めさせる。 ②③ 校内外及び市内外の相談機関に関する情報の共有が不十分である。児童及び保護者を適切な相談機関へつなぐため、また、校内での支援をより具体化するため、関係機関に関する研修会等を開催し、それぞれの機関の強み等の周知に努めたい。	・キャリアパスポートの有効活用ができるよう、考えていってほしい。 ・・SC・SSWとの連携を適切に行い、保護者・児童の困りごとに早期に対応できる体制が整っている。関係機関との連携も積極的で、学校全体として支援の質を高めている。 保護者アンケート「学校は保護者からの相談等に対して迅速に対応していますかの肯定的意見が94．8%は先生方の対応の良さだと感じる。
	<u>特別支援教育の推進</u> ①研修などを通した指導内容・支援方法の理解・共有 ②特別支援教育の充実	① 支援の必要な児童のための指導内容・支援方法の相談 ② 共に生き、共に学ぶことを通した、違いを認め合う学級、学校の実現	① 支援の必要な児童の困り感・手立て等について、校内の研修を通して学び、教師間で共有する。 ② ・交流学級を学校生活の基盤とする。 ・交流学級担任と特別支援学級担任が、連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・特別支援学級では、交流学級や地域での生活を豊かにすることができるように指導する。 ・子どもや保護者の願いを受けとめ、指導・支援する。 ・特別支援学級の子どもたちの理解を図るために、研修会を行う。	① 支援が必要な子を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業作りを考える。 ② すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指す。	B	① 特別支援員に来校していただき、指導を受けた。授業の 中でできる支援方法について教えていただいた。その後、教えてもらったことを学校全体に周知することで、直接指導を受けていない学級も学ぶことができた。 ② 特別支援学級の参観や研修会を行うことによって、普通学級の担任も特別支援学級の子どもたちについて理解を深めることができた。また、研修会以外の場でも、安全配慮が必要な児童について、共通理解を図ることができた。さらに、交流学級担任と特別支援学級担任が、日ごろから、連絡を密にし、意思疎通を図ることができた。	① 引き続き、専門的な視点から意見をもらい、きめ細やかな支援の方法を考えていく。 ② 今後も、保護者と連携を図りながら、すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指していく。	・・専門家の助言を学校全体で共有することで、特別支援の視点が全教職員に広がり始めている点を高く評価したい。交流学級との連携も丁寧に行われている。 ・・今後も、ユニバーサルデザインの授業づくりを推進し、すべての児童が学びやすい環境づくりを期待する。そのためにも、先生方の児童に対する意識と、保護者の意識が統一できるようお願いしたい。
	<u>教職員の資質向上</u> ①研修等の充実	① 授業力の向上と授業改善を目指した授業公開の実施	① ・校内研究授業・事後研究会を年4回行い、スキルアップ研修会（年間6回）、授業コンサルティングを実施し、授業力の向上を図る。	① ・教職員アンケートにおいて、「校内研修として授業公開・事後研究会を実施し、参加していますか」の項目に対して、肯定的な回答が90%を超える。 ・研究テーマについて職員で研究を深め、授業力の向上と授業改善が行われる。	A	① ・教職員アンケートにおいて「校内研修として授業公開・事後研究会を実施し、参加していますか」の項目において、肯定的な回答が95%を超えた。 ・校内研究授業、事後研究会、スキルアップ研修会を予定通り実施することができた。 ・授業コンサルティングを年22回実施することができた。	① ・校内研究授業の回数や授業コンサルティングへの参加を増やし、授業力向上を進めていきたい。	・教職員の資質向上ができたと言うことはすばらしい。その影響が児童たちにも及ぶよう期待する

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	① 学校運営協議会の活動の充実 ② 学校情報の積極的な発信	① 学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ② 学校だより、学年だよりを月1回以上発行する。 ・学校ホームページを月10回以上更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	① 学校支援の具体案を協議し、実施することができる。 ② 保護者アンケートにおいて「学校だより・学年だより・学校ホームページ等により、学校の様子を知ることができる。」と回答した割合が90%以上になる。	A	① ・夏季研修会で、教職員と学校運営協議会委員との会を開催し、今後の連携を図った。（今年度3回目） ・今年度新たに、畑ボランティアが誕生し、地域の方と児童が、収穫物を通して交流し合える場ができた。 ② 保護者アンケートにおいて「学校だより・学年だより・学校ホームページ等により、学校の様子を知ることができる。」と回答した割合が90%以上だった。。	① 学校運営協議会で話し合ったことが、実際の活動につながってきている。今後も、教職員と運営委員会が連携し、子どもたちへの支援策が生まれる会としていきたい。 ② 今年度も保護者の肯定的意見は90%を超えたが、今後より100%に近くなるよう保護者が求める必要な情報を発信してい。く	・先生方の生の声を聞きながら、地域との橋渡しを一緒に行っていきたい。また、体験活動やお手伝いを増やしていきながら、子どもたちの成長につなげていきたい。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	① 防災、安全教育の充実 ② 登校指導の実施 ③ 交通ルールの説明、自転車交通安全教室の実施 ④ 安全・安心な学校作り ⑤ 教師としてのやりがいを大切にした業務改善の実施	① 火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施し、事後指導で、身の守り方を再度確認する。 ② 毎学期始め、校区の危険箇所に立ち児童の登校している様子を確認する。 ③ 警察の方に、交通ルールのことや、自転車の乗り方など指導してもらい、長期休み前などに、再度学級でも指導する。 ④ 安全点検を月1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ⑤ 夏季研修で業務改善にかかる研修をワークショップ型で実施する。	① さまざま場面の避難訓練を計画することで、児童がより迅速かつ安全に避難でき、身の守り方について学ぶことができる。 ② 危険な場所や、登校の仕方で気になることはすぐに対応し、全児童にも指導することができる。安全に登校する児童が増える。 ③ 交通ルールや自転車のルールを守る児童が増える。 ④ 安全点検をもとに、安全に過ごす環境を整えることで、問題のある場所がなくなる。 ⑤ 職員の発案による業務改善を組織的に行い実現する。	B	① 今年度は、火災、防犯、地震の避難訓練を行った。避難経路や避難の仕方、身の守り方について考えることができた。 ② 安全に登校する児童は増えている。車や自転車が多く通る場所や信号がない場所などが校区にはあるので見守りが必要なところが多い。今後も指導していく必要がある。 ③ 長期の休み前に自転車の交通ルールの指導をし、児童への啓発ができた。 ④ 安全点検の結果、学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行うことができた。 ⑤ 夏季研修をきっかけに、業務に関する困り感を職員及び学校運営協議会委員と共有することができた。そこで共有した困り感を解決するため、学校運営協議会委員の発案で、学校支援ボランティアグループが増設されたことが成果だと捉えている。一方で、これらの学校支援活動について、児童と協働する時間を設けられていないことが課題である。	① 児童がいざというときに自分で身を守れるように、避難訓練の仕方や形態について、見直し、改善を行っていく。子どもや保護者にも防災の意識を持ってもらえるように、毎年ランドセルに避難場所等が書かれたカードを入れるようにする。 ② 危険な箇所などは、すぐに確認し、児童に注意喚起を行うようにする。 ③ 引き続き指導と啓発をしていく。 ④ 引き続き学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行う。 ⑤ 学校支援ボランティア活動が児童と協働して展開されるよう、教員への周知、及び年間計画への追加を促す。	・地域内にある「子ども110番の家」の事も子どもたちに周知徹底してほしい。 この4月から自転車のルール罰則が厳しくなるので、併せてルールの教育をしてあげてほしい。 ・・学校支援ボランティアが今年度も新たに誕生するなど、地域との協働が具体的な形で進んでいる。今後は児童と地域が一緒に活動できる機会が増えることを期待する。

学校関係者評価総括
・全般的には、目標に向けて、よくやっていただいていると思う。
・学習能力も大切だが、自己肯定感、自己有用感が高まるような、褒め方や雰囲気づくりを大切にし、学習形態なのもグループ討議をたくさん入れてほしい。
・子どもたちをどのように育てていくか、先生方が共有できているのかが大切だと思う

次年度に向けた重点的な改善点
・次年度は、授業改善を一層進め、対話的な学びや書く活動を充実させて学力向上を図ることが重要である。また、児童が自分の良さを実感できる活動を増やし、自己肯定感を高める取組を強化したい。あわせて、ICT活用の方向性を明確にし、家庭との連携をより深めていく必要がある。不登校や特別な支援を必要とする児童への組織的な支援体制の充実、安全教育・防災教育の質の向上、地域やボランティアとの協働の拡大も引き続き重点的な課題となる。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った